白屋詩人呉芳吉攷

——西安「囲城」期の詩を中心に

中　裕史

はじめに

中華民国の時代に入って「文学革命」が提唱されると、文学に志をもつ青年知識人は、旧来の文語詩に代えて口語詩を作る試みを盛んに行った。こうした青年知識人は、一方で幼少の頃は例外なく儒教の経書を読み、唐詩をはじめとする古典文学にいそしんでいたので、口語詩の制作に従事しながらも、折に触れて文語詩を作ることがあった。

そんな中にあって呉芳吉（一八九六～一九三三）は個性的である。「文学革命」初期には、彼もまた口語詩を作って、その「小車詞」や「婉容詞」は高く評価されたが、その後は口語詩を打ち捨てて文語詩の制作に専念した。といっても、旧態依然とした形式を墨守して旧詩の再生産に努めたわけではない。民国という新しい時代の空気を内容に反映するとともに、詩の形式に対しても旧詩の方法を見直し、長短句を組み合わせて新味を引き

出そうと苦心した。

呉宓は、このことを、「但だ君の旧詩は終に人と異なり、蓋し真に能く新詩・旧詩の意境・材料・方法を一爐に鎔合する者なり（但君之舊詩終與人異、蓋真能鎔合新詩舊詩之意境材料方法於一爐者）」と言っている。(1)

呉芳吉の文語詩にあってひときわ光彩を放っているのは、民国十五（一九二六）年に身を以て経験した西安包囲戦のさまを詠じた一連の詩であろう。おりしも西北大学の教員であった呉芳吉は、八か月にも及んだ籠城戦の目撃者、当事者として、眼前の光景を詩に再現して内心から発する思いをそれに重ね合わせている。

小論では、これら一連の詩の中で最も長大な「壮歳詩」を中心におき、形式の面よりもむしろ内容の面に注目して、呉芳吉の個性がどのような形で表れているのか、詩とどのような姿勢で向き合っていたのかを考察して、これまで論じられることが少なかった中国現代詩の一面を示しておきたい。

一　「囲城」詩と西安囲城

春歸兵未已　　春　帰って　兵　未だ已まず
夏至疫相攻　　夏　至って　疫　相い攻む
饑荒既煎急　　飢荒は既に煎(せ)まること急にして
貧困復難容　　貧困は復た容れ難し

右は、呉芳吉が民国十五（一九二六）年に西安にて詠じた「囲城」四首のうち、第三首冒頭の四句である。(2)春が過ぎ去っても戦闘は已むことなく、夏になって追い打ちをかけるように街に疫病がはやって、飢えと貧困

とが人びとに迫る様子を慨歎している。

この時、西安を包囲、攻撃したのは直隷軍閥の呉佩孚配下の劉鎮華であり、西安の守備にあたっていたのは馮玉祥麾下の李虎臣と楊虎城であった。[3] 呉佩孚は奉天軍閥の張作霖と手を結んで、各地で馮玉祥の国民軍に攻撃をしかけていた。

馮玉祥は自らが根拠地である西北を離れ、視察と称してソ連に出ることによって、呉佩孚の攻勢をかわそうとしたが、呉佩孚はなおも攻勢を緩めず、劉鎮華に西安の攻略を命じたのであった。

劉鎮華軍は四月中旬に西安を包囲して攻撃を開始したが、李虎臣と楊虎城もよく守ってつけいる隙を与えなかったので、劉鎮華は攻撃を停止して兵糧攻めに転じた。この籠城戦は二百余日も続くのである。

道路多流亡　　道路　流亡するもの多し
幾人興悲咤　　幾人か　悲咤を興(おこ)さん
西隣老牧師　　西隣の老牧師
惻然開廣舎　　惻然として広舎を開く
冒死扶創痍　　死を冒して創痍せしものを扶けんとするも
彈丸紛四射　　弾丸は紛として四射す
賴君人道存　　君に頼って人道は存す
含涕何能謝　　涕を含んで何ぞ能く謝さん

右は「囲城」の第二首後半の八句である。行くあてを失ってさまよう大勢の人びとを見ても、他人事のよう

にして憐憫の情をもよおす者とていない。そのような状況にあって、年老いた牧師が教会を開放して、弾丸が飛び交う中で、負傷者の救護にあたっている。呉芳吉は、こうして人の道が行われているのを目の当たりにして、貴方のおかげで人道は失われないのです、目頭は熱くなるがどのように感謝したらよいものかと、牧師への深い感謝の意を表している。

「囲城」は五言詩四首で構成されているが、各首で句数が異なっていて、第一首と第三首は十二句、第二首は十六句、第四首は十四句となっている。内容についていえば、さきに見たように、第二首と第三首は西安の街の状況に目を向けたものであり、第一首と第四首は自らの日常と感懐を詠じたものである。

「囲城」第四首の冒頭八句において、呉芳吉は、つぎのように詠じている。

隨遇不愁歸　遇に随いて帰することを愁えず
忘生不畏死　生を忘れて死を畏れず
四海既銷兵　四海　既に兵を銷すも
三秦禍無止　三秦　禍い止むこと無し
戰亂奈我何　戦乱　我を奈何せん
安知非天使　安くんぞ知らん　天の使むるに非ざるを
使我察吾民　我をして吾が民を察せしめ
爲民鳴疾痛　民の為に疾痛を鳴らさしむ

籠城戦の窮迫した状況にあっては、生きていることを実感する余裕もなく、死ぬことを愁えたり、畏れたり

することもない。国内では兵火が止みつつあるというのに、ここ西北ではなおも軍事衝突が続いている。しかし戦乱もわたしをどうすることもできない。天によって使命を与えられたのではないと言えないのだから。わたしには人びとの様子を心にとめてその苦しみを代弁する役目があるのだ。

このように、「囲城」詩において、呉芳吉は、籠城戦のために難渋を極めている人びとに視線を向けて、その苦しみを訴えているが、それは天から与えられた使命を果たすためであるとの認識、すなわち使命感に基づくものなのである。

二「壮歳詩」

呉芳吉の囲城詩連作のなかでひときわ異彩を放っているのが「壮歳詩」である。「壮歳詩」は以下に引く序のあとに、三言、四言、五言、六言、七言、九言、十一言などさまざまな字数による五百を数える句を続ける長大な詩篇である。

民國十五年丙寅五月二十一日、吾れ三十の生期爲り。時に方に長安の囲城に因って生死料り難し。其の苟安なるに趁(じょう)じ、感じて此れを賦す。天命未だ終わらずんば、應に恙無きを獲べし。倘(もし)不諱有らば、此れ最後の一息と爲さん。

（民國十五年丙寅五月二十一日、吾爲三十生期。時方因長安圍城、生死難料。趁其苟安、感而賦此。天命未終、應獲無恙。倘有不諱、此爲最後一息。[4]）

序によれば、呉芳吉が「壮歳詩」を書いたのは、民国十五（一九二六）年の五月二十一日（新暦六月三十日）である。而立の齢を迎えた呉芳吉は、劉鎮華軍による西安包囲のために、明日をも知れぬ危うい状況に陥った。その感慨をうたったのが「壮歳詩」であって、戦闘が膠着状態にある間に書きあげた。天命が尽きるならばこれが絶筆となろうという、悲壮な覚悟のもとに詩作がなされたのであった。

天遣呉生鳴不平　天　呉生をして不平を鳴らさ遣めんと
単騎冒險來西京　単騎　険を冒して西京に来たらしむ
於時呉生年方壮　時に於いて呉生　年方に壮たり
精神瀰滿血洋盈　精神は瀰満して血は洋盈す
私闘連年不解兵　私闘　連年　兵を解かず
饑荒三月困圍城　飢荒　三月　城を囲むに困しむ
奇冤無盡人無數　奇冤は尽くること無く　人は数うる無し
明知此身難保不合死呑聲　明らかに知る　此の身は保ち難きも合（まさ）に死して声を呑むべからざるを

詩の冒頭八句は、平声庚の韻を用いて、この詩を作らねばならなかった理由を述べる。さきに見た「囲城」詩第四首で、天が「我をして吾が民を察せしめ、民の為に疾痛を鳴らさしむ」と詠じた呉芳吉は、ここでも、三十歳の男ざかりであり、「精神は瀰満して血は洋盈」している自らが、天に遣わされて西安に到来した上は、たとえ生命に危険が及んだとしても声をあげないわけにはいかないといい、知識人としての使命感に基づいて民衆の苦しみを代弁しようとする強い意志を示している。

呉芳吉の「自訂年表」民国十五年丙寅三月初四日の項には、以下の記載がある。

呉佩孚　劉鎮華を遣わして西安に寇(あだ)せんと、十師の兵力を以て城を囲ましむ。陝西督弁李雲龍・師長楊忠敗兵五千人を集めて城に憑って之を禦ぐ。是れ自り二百三十日を歴て、日として戦いの中に在らざる無し。

（呉佩孚　遣劉鎮華寇西安、以十師兵力圍城。陝西督辦李雲龍、師長楊忠、集敗兵五千人憑城禦之。自是歷二百三十日、無日不在戰中。(5)）

さきにも述べたが、直隷軍閥の呉佩孚が、馮玉祥を打倒すべく、劉鎮華に十個師団を率いさせて西安攻略に向かわせた。対する馮玉祥麾下の国民軍は、河南から敗走してきた李虎臣（李雲龍）の部隊に加えて、陝北に屯していた楊虎城（楊忠）の部隊が西安に入城し、合わせて五千人が西安の守備についていた。旧暦の三月四日に包囲戦が開始されてから、国民軍の孫良誠によって包囲網が解かれる旧暦十月二十四日まで、じつに二百三十日もの長きに渡って、西安の住民は籠城の辛酸を嘗めつくしたのであった。

「壮歳詩」は籠城戦に入って三カ月目に作られていて、第六句に「飢荒三月」とあるのは、旧暦三月四日から五月二十一日までの期間を言ったものである。

雀苻此土尤猖獗　　雀苻　此の土に尤も猖獗
當中兩虎聲赫赫　　当中　両虎　声赫赫たり
恃城死守足風威　　城を恃んで死守して風威足る
二十萬人非所惻　　二十万人は惻(あわれ)む所に非ず

詩は第二十七句から西安城にたてこもる軍隊への批判に転じる。右は入声陌の韻および職の韻を用いた七言の四句である。匪賊はこの西北の地で猖獗をきわめているが、その中でも李虎臣・楊虎城の名声は響きわたっている。この両人は威勢よく西安城を死守する構えを見せているが、城内二十万人の住民を憐れに思う気持ちなどさらさら無いのだ。

呉芳吉は、西安の守備にあたる国民軍の部隊を「萑苻」と呼んで賊軍と見なし、指揮官の二人が住民の苦しみに目を向けようともしないことを批判している。

これに続けて、五言、六言、七言のそれぞれ一段を置いて西北における軍閥の非道ぶりを述べた後、今度は去声の韻字を用いた四言六句を用いて街頭の具体的な描写に移る。

行者側目　　行く者は目を側め
居者潛歎　　居る者は潜かに歎ず
家無壯男　　家に壮男無く
驅婦掘塹　　婦を駆って塹を掘らしむ
盎無斗儲　　盎に斗儲無く
當餐送飯　　餐に当たって飯を送る(6)

道を行く者も家に居る者も、表立って窮状を訴えることはできず、ただ嘆くばかりである。働き盛りの男は兵士や軍属として徴発されてしまい、女手まで借りて塹壕を掘らせている。籠城が長引いて糧食も尽きようとしており、篤志家が送ってくれる食料が頼りである。

この後、五言六句を挟んで、「南城東闕、情何ぞ惨愴たる」と再び四言二句を置き、続けてやはり去声の韻字を用いて五言の句を連ねていく。(7)

盡室駐大兵　　尽室　大兵を駐め
深宵驚激戰　　深宵　激戦に驚く
堂前隨馬溲　　堂前　馬の溲(いばり)するに随い
酒後索人玩　　酒後　人を索めて玩ぶ
閨女逃不得　　閨女は逃れんとして得ず
蒼黃枯井踐　　蒼黄として枯井に践(ふ)む
兼旬失所依　　兼旬　依る所を失い
委棄復何算　　委棄されて復た何ぞ算えん
鼓角滿城頭　　鼓角は城頭に満ち
黃昏歸鳥喚　　黄昏に帰鳥は喚(な)く
頃刻難民集　　頃刻にして難民集まり
哭聲四五萬　　哭声　四五万

あらん限りの部屋には兵士が駐在し、激しい戦いに深夜でも目を覚まさせられる。建物の前では馬が小便のし放題、酒を飲むと女性はいないかと探して相手をさせる。良家の娘は逃れようとするが間に合わずに大慌てで枯れ井戸に隠れる。このようなことが続くと頼れる先もなくなって見捨てられてどうにもならなくなる。軍

鼓や角笛の音は城じゅうに響きわたり、黄昏時には巣に帰る鳥の声も喧しい。その頃になると行くあてのない人びとが集まってきて、四、五万もの人びとの泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

これに続く五言四句の後、今度は七言に転じて、次に引用する十二句では平声尤の韻を用いて、飛来する砲弾の下で、街の人びとが息を潜めて無事を祈るさまや負傷しても病院で手当ても受けられず、死んでもひつぎすら確保できない悲惨きわまりない状況を訴える。

城下朝朝戰不休　　城下　朝に朝に　戦って休まず
一聲礮響萬家愁　　一声の砲響　万家愁う
巨彈如潮何處避　　巨弾は潮の如く　何れの処にか避けん
各祈飛墮遠天頭　　各(おのおの)は祈る　飛んで遠天頭(とおく)に堕ちんことを
東牆倒過西牆阪　　東牆は倒れて西牆の阪(すみ)に過ぎ
大樹摧同小樹蹂　　大樹は摧かれて小樹と同(とも)に蹂まる
却忘生命不如蟻　　却って生命を忘れること蟻に如かず
過後相逢笑語悠　　過ぎて後相逢うて笑い語ること悠たり
鄰兒傷重獨懼憂　　隣児　傷重く独り懼れ憂う
治療安頓兩無由　　治療・安頓　両つながら由無し
幾家病院屍盈滿　　幾家の病院に屍盈満つ
二寸桐棺軍扣留　　二寸の桐棺も軍は扣留す

西安の城下では毎朝のように戦いがあり、大砲の音が響くと街じゅうが不安におののく。砲弾は打ち寄せる潮のように飛んできて避ける術もなく、ただ遠くに墜ちてくれと祈るばかり。塀は倒れて反対側にまで倒れ、大きな木も砕かれて小さな木と同じように踏みつけられている。こうも生きている実感がなくなれば蟻の方がまだましで、砲声がおさまって知り合いに行き逢うと何事もなかったことを喜びあう。隣家の子どもが重い傷を負っても心配することしかできず、治療の方法も安静にさせておく場所も見当たらない。病院は運び込まれた屍でいっぱいだし、小さな棺桶ですら軍が差し押さえている。

この後、五言四句、六言十四句を挟んで、「蓮花池、喇嘛寺、幾たりの冤魂、此こに棄て置かる、夜　啾啾たり　鬼市に聆く」（蓮花池、喇嘛寺、幾冤魂、此棄置、夜啾啾兮聆鬼市）と、無辜の民が殺されてその屍が蓮花池や喇嘛寺に打ち捨てられるさまに対する悲しみと怒りを、詩の調子を転換しながら表わすと、これに続けて今度は七言六十句を並べて、城は守っても、民を守ろうとはしない李・楊軍の残虐を非難する。

作戰爲民辛苦多　　戦いを作して民の為に辛苦多く
綁票括錢屬正義　　綁票括錢　正義に属す
但云通敵肆捕捉　　但だ云う　敵に通ずるは肆に捕捉せん
但云藏奸私處治　　但だ云う　奸を蔵するは私に処治せん
但云厝薪當藉没　　但だ云う　薪を厝くは当に藉りて没すべし
但云儲米成罪戾　　但だ云う　米を儲えるは罪戻と成さん
煌煌禁令槍空發　　煌煌として槍の空しく発するを禁令するも
街頭瞄準擊人戲　　街頭に瞄準して人を撃って戯る

民の為に戦っているのだから人さらいをして身代金をせびってもそれは正義だと言う。しかし民に対しては、内通すれば捕縛するぞ、内通者を匿えば処罰するぞ、薪を持っていると没収するぞ、米を蓄えていると罪に問うぞと言う。むやみに発砲することまかりならぬとお達しを出しておきながら、街頭では兵士が遊び半分で人を狙って銃を撃つ。

この後も、七言の句を基調にしつつも、三言や四言、五言、六言、九言などの句を交えて長短の変化をつけながら、軍閥の非道と民の惨状を綴っている。三百句を越えたところから、籠城戦が始まる前の西安の美しい風景の描写に転じる。

憶昨長安春早　　昨(さき)の長安の春早きを憶うに
寒食初度　　寒食初めて度(わた)る
微雲太白天　　微雲　太白の天
芳草樊川路　　芳草　樊川の路
走馬韋曲　　韋曲に馬を走らせ
行歌灞杜　　灞杜に行歌す
徑入少陵之居　　徑は少陵の居に入りて
花發玄奘之墓　　花は玄奘の墓に発(ひら)く
白雪疊乎千峯　　白雪は千峯に畳(かさ)なり
紅桃明逾萬樹　　紅桃は明らかに万樹を逾ゆ
溪田碎若琉璃　　渓田は砕けて琉璃の若く

石瀬羣棲鵜鷺　　石瀬は群れて鵜鷺棲む[8]

呉芳吉が西北大学の教授となって初めて西安に入ったのは、一九二五年七月末であった。この時期は西安も平穏であり、西北大学の授業も多くなかったので、秋から翌春にかけて近郊の名所旧跡を訪ねてまわった[9]。太白山を望み、樊川や灞水、韋曲に遊び、杜甫の故居や玄奘の墓を訪れた。

その時には、雪をいただいた山々も、紅い桃の花も鮮やかであったし、日の光を受けて輝く棚田も鷺が群れる浅瀬も美しかった。

この後は、やはりさまざまな字数の句を用いて長短の変化を求めながら、美しかった西安の荒廃ぶりを嘆く一段を置く。

我來恨晩　　我来たること晩きを恨み
猶及良宵　　猶お良宵に及ぶ
經茲戰亂　　茲の戦乱を経て
赤土空郊　　土を赤くし郊を空しくす

古都長安の面影を訪ねて皇帝や文人たちゆかりの地を巡っていた呉芳吉には、まだ訪れていない場所があり、一度行った場所でも再び訪れてみたい気持ちもあったであろう。それがこの戦闘によって焦土と化してしまった。古都の面影を偲ぶよすがを失った無念さが伝わってくる。

詩の結びを迎えるところで、呉芳吉の筆は一転して、郷里ならびに家族に向けられる。上声の韻を用いて、

途中に九言二句を挟み、七言二十四句によって、自らの決意を表明する。

兩地兵戈無時了　　両地の兵戈　了る時無く
蜀黔邊釁復騷攪　　蜀黔の辺釁(きん)　復た騒攪す
自從春暮絶交通　　春の暮れ自従(よ)り交通絶えて
不知猜我猶完好　　知らず　我猶お完く好しと猜(はか)るを

軍閥の戦闘は止むことなく、四川と貴州の境でも不穏な動きがある。包囲戦がはじまった春の終わりからは交通も途絶えて、郷里の家族はわたしが無事でいると思っているだろうか。家族に思いを馳せた呉芳吉は、眼前に繰り広げられる軍閥の無道と人びとの窮乏とに対して、自らのなすべきことを改めてはっきりと宣言する。

安能坐視世風頹　　安くんぞ能く世風の頽(すた)れるを坐視し
歎息空悲徒自保　　歎息して空しく悲しみ徒(いたず)らに自ら保たん
當爲吾親繼志業　　当に吾が親の為に志業を継ぐべし
當爲吾妻慰愠懊　　当に吾が妻の為に愠懊(うらみなやみ)を慰めるべし
當爲吾兒達才姿　　当に吾が児の為に才姿を達せしむるべし
當爲吾友敷文藻　　当に吾が友の為に文藻を敷くべし
當爲吾民作喉舌　　当に吾が民の為に喉舌と作(な)るべし
當爲先型述儀表　　当に先型の為に儀表を述ぶべし(10)

世の風潮が廃れるのを傍観するばかりで、ただため息をつき自分だけが無事でいられるものではない。親の志は継がねばならない。妻の不安は慰めてやらねばならない。子の才能は伸ばしてやらねばならない。友人のためにいい文章を書かねばならない。人びとに代わってものを言わねばならない。これまで理想とされてきたもののために規範を述べねばならない。

家族からはじまって友人、民衆へと放射状にひろがるすべての人のために力を尽くすこと、これこそが自らの使命であると呉芳吉は表明しているのだ。

三　義憤と使命感

これまで見てきたように、呉芳吉は、周囲にある人びとの苦しみを見て義憤を覚え、彼らに代わって苦衷を訴えることを天から与えられた使命であると感じていた。周囲にある人びととは、家族、友人、民衆と、自らを中心とする大小の同心円に存在する人びとのことであり、呉芳吉は直接、間接の関係をもつ人びとのために自らの力を尽くそうとした人道主義者であり、正義の人であった。

では、彼にこのような使命感を抱かせたものは何であったのか。以下に、呉芳吉の経歴を参照しながら、この点について考えてみたい[11]。

呉芳吉は、一八九六（光緒二十二）年の旧暦五月二十一日に重慶で生まれた。本籍は同じく四川の江津県である。父親は重慶で商売をしていたが失敗し、訴訟に巻き込まれて投獄された。呉芳吉は母親とともに江津県の伯父の世話になって暮らしをたてた。

苦しい生活の中でよく勉学に励んで、一九一〇（宣統二）年に開設された清華学校の一期生として入学した

が、翌年、四川出身の同級生がアメリカ人教師と衝突して除籍されたことに抗議したところ、呉芳吉自身もまた除籍の処分を受けた。

謝罪文を書けば復学が許されたが、呉芳吉はそれを潔しとせず、憤然として清華学校を去った。しばらく北京にとどまったが、一九一三年には北京を後にして郷里に向かった。途中で路用の金が尽きてしまい、湖北省の宜昌からは、物乞いをしながら徒歩で五カ月もかかって辿りついたのであった[12]。

一九一五年は、早魃にあって郷里での暮らしが立ち行かなくなり、清華学校の同級生であった呉宓の紹介で上海の出版社で働いたりしたが、翌年、郷里が軍閥に脅かされていると聞き、家人の身を案じてまた郷里に戻った。その途次、忠州で間諜の疑いをかけられて軍閥に捕らえられ、殺されそうになったこともあった[13]。

軍閥に生命を脅かされた経験はこれにとどまらない。長沙で教員をしていた一九二二年には、湖南軍閥内で抗争が発生して、譚延闓が趙恒惕を砲撃した際に、流れ弾が呉芳吉の寓所にしばしば飛来した[14]。

郷里で暮らす家人の平穏な生活がかき乱されたのも、前述の一九一六年だけのことではない。一九二五年に、四川と貴州の軍閥が郷里を侵した時、兵士が呉芳吉の家人の住まいに一月以上も居座ったこともあった[15]。

呉芳吉は自らを苦しめ、家人を苦しめる、こうした軍閥の非道に強い憤りを覚えていた。前に引いた「壮歳詩」で軍閥の残虐を何度も重ねて述べているのは、西安囲城において眼前に繰り広げられる悪辣な行為への非難であることは無論であるけれども、その背景に、自らと家人とがかつて幾度も味わった辛酸とそれに対する憤懣とが存在することは言うまでもない。

呉芳吉は、郷里を離れて北京や上海、長沙、西安と単身で暮らしていたために、郷里で暮らす家族を思う気持ちは強い。まして郷里はたびたび軍閥に脅かされたのであるから、さらに思いは増したことであろう。

前に述べたように、呉芳吉は人道主義者であり、正義の人であったが、彼が使命感をもって詩を作ったのは、

幼少の頃から彼自身重ねてきた貧しさゆえの苦労があり、離れて暮らす家族の身を案じる気持ちがあって、それらが根底となって、しだいに周囲の人びとの境遇に同情し、もの言えぬそれらの人びとになり代わって苦衷を述べ、不平を鳴らそうとしていったのではないだろうか。

四　西安の解放

馮玉祥は一九二六年十一月二十八日の日記にこう記している。

劉郁芬の来電に接す。二十七日早四点、我が軍　長安を占領す。孫良誠・劉汝明・方振武　途を分けて追撃す、と。噫(ああ)！　長安の人民　困しめらるること八月、子を易えて食らい、骸を析(さ)いて爨(かし)ぐ。今　慶を得て生を更(あらた)む！　電を聞きし後、僅かに軍事勝利の為に喜ぶのみならず、尤も陝民の為に賀するなり。（接劉郁芬來電、二十七日早四點、我軍占領長安。孫良誠・劉汝明・方振武分途追擊。噫！　長安人民被困八月、易子而食、析骸而爨、今得慶更生矣！　聞電後、不僅爲軍事勝利喜、尤爲陝民賀也。(16)）

ソ連から帰国した馮玉祥は、綏遠の五原において態勢を立て直し、九月十七日に、国民軍を国民連軍と改称して国民党に加入し、自ら国民連軍総司令に就任すると表明した。そして西安の包囲を解いて陝西を奪回するために、配下の部隊を繰り出した。孫良誠らの部隊が劉鎮華の軍を破って西安の囲みを解いたのは十一月二十七日のことであった。二百三十日もの長きにわたって続いた籠城がようやく終わりを告げたのである。

「自訂年表」民国十五年丙寅十月には、「城中の餓死者は日びに千人以上に達し、全城戸口二十万、死者は三

分の一以上に達す[17]」と記されている。馮玉祥が日記に記した文章も、あながち誇大な表現と断じることはできないだろう。

西安を解放した孫良誠の軍には、呉宓の父が総参議の要職にあって、呉宓の依頼を受けて呉芳吉を探し出してくれ、郷里にある両親も呉宓の援助で無事であると知らせてくれた。八カ月もの間、身動きがとれない中でずっと気がかりであった両親の無事がわかって、呉芳吉はようやく安堵の胸をなでおろしたのであった[18]。

長い籠城戦がようやく終わった喜びと、清華学校以来何くれとなく面倒を見てくれて長兄と慕う呉宓の父に会えた嬉しさは、「長安の囲は解け、始めて仲旂叔父に馬師長の軍次に謁す」に、次のように表現されている。

馬公天上飛將軍　馬公は天上の飛将軍
長安萬姓死復生　長安の万姓　死して復た生く
十日不來剩荒城　十日来らずんば荒城を剰(あま)さん
吾叔參議鬼神驚　吾が叔(おじ)の参議たること鬼神も驚く
叔姿嬌嬌鸞鶴行　叔の姿は嬌嬌として鸞鶴の行くがごとく
叔顔朗朗瓊瑛晶　叔の顔(かんばせ)は朗朗として瓊瑛の晶(あき)らかなるがごとし
聞叔所語比蘭馨　叔の語る所を聞けば蘭の馨りに比し
侍叔談久忘骸形　叔の談ずること久しきに侍れば骸形を忘る[19]

天兵を率いて地上に降り立ったかのような馬将軍のおかげで、長安の市民は九死に一生を得た。あと十日来るのが遅れれば長安は荒廃してしまっていただろう。叔父上がその軍の参議であるとは鬼神も驚かんばかりの

望外のこと。お姿は鸞鶴のように品格があり、お顔は宝玉のように輝いている。お言葉は蘭の馨のようにかぐわしく、お話に聞き入っていると我を忘れてしまう。

もはや極限状態にまで追い込まれていた呉芳吉が、生命の危機から脱することを得て安堵し、喜ぶ気持ちが率直に表現されている。塗炭の苦しみから市民を解放してくれた援軍の中に呉宓の父が参議として従軍し、呉宓の意をうけて自分を探し出してくれたことに対する深甚な感謝が、その居住まいや言動を賞賛する詩句からストレートに伝わってくる。

こうしてようやく日常に平穏を取り戻した呉芳吉の心は、何よりも大切な家族に向けられていく。

呉芳吉は、「鄧禹傒先生の聘に報ず」の冒頭で、「長安　八月　血は流れ溶(あら)い、満市の生霊　惟(ただ)だ半ば全きのみ（長安八月血流漲、滿市生霊惟半全）」と詠じている。これに続けて、西安の人びとが被ったこのような大きな災厄に改めて思いをいたす一方で、長い苦しみから解放された安堵を郷里に帰ることができる喜びに重ねて、「飛鳥は旧林を恋い、游魚は故淵を思う。喜んで我れ寐ぬる能わず、一たび寐ぬれば飛仙と成らん（飛鳥戀舊林、游魚思故淵。喜我不能寐、一寐成飛僊）」と、陶淵明「園田の居に帰る」その一を踏まえて詠じている[20]。

その郷里に帰ることができる喜びを、呉芳吉は「帰途」十首のなかでつぎのように表わしている。

誠知此來歸　　誠に知る　此(このたび)来帰れば
一家驚復喜　　一家　驚き復た喜ばんことを
父聞我生還　　父は我れ生還すと聞けば
衰病忽離體　　衰病　忽ち体を離れん

母聞我生還　母は我れ生還すと聞けば
餐飯逾常旨　餐飯　常の旨さを逾えん
妻聞我生還　妻は我れ生還すと聞けば
晩妝凝涙理　晩粧　涙の理を凝らさん
兒聞我生還　児は我れ生還すと聞けば
曉隨鴉雀起　暁に鴉雀に随って起きん[21]

自分が無事に生きながらえて郷里に帰って来ると聞けば、家族はみな驚喜するだろうと家族一人一人の気持ちに思いを馳せている。父親の病は軽快するだろうし、母親は腕によりをかけて美味しい食事を作ってくれるだろう。妻の化粧をした顔には涙の痕が残っているだろうし、子は朝のまだ暗いうちからから起きて待っていることだろう。

右に引いたのは「帰途」第二首である。この詩は、上声薺の韻（體）も混じってはいるが、偶数句末に上声紙の韻を用いた五言と七言の句によって構成されている。引用したのは第七句から第十四句であるが、ここには家族のそれぞれが呉芳吉の無事を喜び、その帰りを待っている様子が目に見えるように謳われている。家族のこうした様子は詩人の想像であるけれども、この想像の根底には家族一人一人に対する詩人の愛情があって、それが方向を変えて家族への思いとなって謳われているのである。

おわりに

呉芳吉は一九三三年に世を去った。まだ三十七歳の若さであった。その死を悼み、その業績を懐う人びとは、呉芳吉が校長を務めた四川大学において追悼式を催した。席上、李劼人は次のように追悼の言葉を述べている。

彼はひとりの詩人でありましたが、風を吟じ、月を弄んで、さしたることのない恨みや愁いをまき散らすつまらぬ詩人ではありませんでした。杜甫のように、天を悲しみ人を憫れむ心をもち、白居易のように、社会に対する平易で親しみやすい考えをもち、いつも国を救い民を救うことを考え、いつも民の果てしない冤罪の路に一筋のまっすぐな道を切り開こうとしました。(22)

さきに呉芳吉は人道主義者であり、正義の人であったと述べたが、李劼人は独特の言い回しで同じことを述べていると考えていいだろう。では、呉芳吉の詩に取り組む姿勢やその信条の根底をなすものは何であったのかといえば、それは家族に対する深い愛情であったということができる。

呉芳吉は自らの詩集に『白屋呉生詩稿』と名付けているが、白屋とはもともと郷里の住まいを父親がそう呼んでいたもので、呉芳吉がその後各地に移り住んだ時も自分の住まいをやはり白屋と呼んでいた。白屋とは粗末な家の意であるが、呉芳吉はそうした父親の心を忘れないために詩集にこの名を冠したのである。(23)

李劼人が言及した杜甫の詩には家族愛を表現した作品が少なからず見受けられる。また、白居易も民の苦しみに目を向けた詩人であった。呉芳吉の文語詩を読む時、こうした古代の詩人の影響を視野にいれることは必要であろうと思われる。その際には、内容の面における影響、および形式の面における影響の双方の点から検討を加えていくことが大切である。拙論ではほんのすこししか触れることができなかったが、呉芳吉が挑んだ新たな形式の探索については、いずれ稿をあらためて論じてみたいと考えている。

注

（1）呉宓「呉芳吉伝」（『呉芳吉全集』（華東師範大学出版社、二〇一四年）下巻、附録に収載）。呉宓（一八九四～一九七八）は陝西の人。アメリカなどへの留学を経て帰国後は清華大学などで教鞭をとる。『学衡』誌を一九二二年に創刊。古典主義を提唱した。

（2）『呉芳吉全集』上巻、巻一詩歌。

（3）丁中江『北洋軍閥史話』（中国友誼出版公司、一九九二年）第四集、四七〇～四七二頁。

（4）『呉芳吉全集』上巻、巻一詩歌。

（5）『呉芳吉全集』上巻、巻二散文。

（6）歎は翰、塹は艷、飯は願の韻である。

（7）戦・踐は霰、玩・算・喚は翰、萬は願の韻である。

（8）去声遇の韻を用いる。杜は上声麌の韻字であるが、現代語では度・路・墓・樹・鷺と同じ韻母をもつ。

（9）前に引いた「自訂年表」には、民国五年から民国十六年までの間の出来事が記されてあるが、民国十四年乙丑の項に、「秋七月十八日、發北京。（中略）月杪、安抵西安。（中略）大學課少時多、因得於半年以内、遍游近郊」と記載されている。

（10）了・表は篠、攪・飽は巧、好・保・藻は皓の韻で、懊は去声号の韻である。

（11）劉樸「呉芳吉伝」（『呉芳吉全集』附録一伝記）および金国永「呉芳吉」（四川省地方志編纂委員会省志人物志編輯組編『四川近現代人物伝』四川省社会科学院出版社、一九八六年、二六一～二六四頁）に拠る。

（12）「自訂年表」民国五年丙辰の項に以下の記載がある。

「初、民國二年再自北京歸蜀、賴雲陽鄔君鏡蒼之助、得至宜昌、後乃沿江乞食以行。時當討袁軍興、孑身出入戰地匪巢、歷時五月、繞行三千餘里。」

（13）「自訂年表」民国五年丙辰の項に以下の記載がある。

「聞朔寇張敬堯掠江津而上、家人逃散、因與（鄧）紹勤兼程歸省。二月初四、自滬西上、三月三日至忠州、爲寇所虜、以爲偵探、幾被殺江干矣。婉言得解、竟於三月十八日抵家。」

(14)「自訂年表」民国十一年壬戌に以下の記載がある。

「秋七月、湘軍内訌。譚延闓湘軍據岳麓磯擊長沙、歴五十日。流彈日日至某寓所。」

(15)「自訂年表」民国十四年乙丑の項に以下の記載がある。

「夏四月、川黔軍滋擾鄉里、亂兵迭駐家中、經月不去。家人不敢晝出、某聞信歸。五月十八日抵家、兵已退。」

(16) 中国第二歴史檔案館編『馮玉祥日記』（民国名人日記叢書、江蘇古籍出版社、第二冊、一九九二年、二五八頁）。

(17)「自訂年表」民国十五年丙寅十月に以下の記載がある。

「二十日後、城中餓死者日達千人以上、全城戸口二十萬、死者達三分之一以上。」

(18)「自訂年表」民国十五年丙寅十月に以下の記載がある。

「二十四日黎明、西北國民第一軍總指揮孫良誠所部回紇騎兵萬人入西安。西安圍解。援軍總參議、則長兄之父仲旂公也。命人遍訪某之生死下落、知二親有長兄奉養、甘旨無闕、懸心凡八閲月至是頓釋。」

(19)『呉芳吉全集』上巻、巻一詩歌。この詩は七言詩であるが、第六句までは第一句を除く各句末で平声庚の韻、第七句から第十二句は各句末で平声青の韻というように、六句ごとに韻をかえて詠まれている。

(20)『呉芳吉全集』上巻、巻一詩歌。

(21)「帰途」十首その二（『呉芳吉全集』上巻、巻一詩歌）。

(22)『李劼人全集』第七巻散文（四川文芸出版社、二〇一一年）。原文は以下の通り。

「他雖是一個詩人、但却不是通常吟風弄月、抛撒點閑恨閑愁的詩匠、而是具有杜甫悲天憫人的思想、白香山平易近人的社会観念、逐處要想救国救民、逐處要想在民衆悠悠的冤枉路上開一条直徑。」

(23)「『白屋呉生詩稿』編輯大意」（『呉芳吉全集』上巻、巻二散文）。

A Study of Wu Fangji
Mainly on the Poetry in the Siege of Xi'an

Hiroshi NAKA

Abstract

Xi'an（西安）was besieged by the military clique under Wu Peifu（呉佩孚）in 1926. The besieged held the city for two hundred and thirty days. People in Xi'an had great distress and over thirty percent of the citizen died off through the battles and lack of food.

Wu fangji（呉芳吉）, as a professor at Xibei（西北）university in Xi'an, experienced the terror at first hand. He wrote poems and complained of the hardship for the people in Xi'an. At the same time, he blamed the besieged for not taking compassion on war refugees. It is apparent he had a vocation to complain about pains and hunger for the people in Xi'an.

What was behind his having such a vocation, I think, he suffered from poverty and atrocity by military cliques in his hometown from early childhood. Wu Fangji took care of his family wherever he was and spread his compassion over the people around him, and over the people having great distress for the civil war by degrees, like a pebble into a pond. Wu Fangji was a poet with a strong sense of vocation.